

第2回検討会を踏まえた今年度対応状況及び今後の対応(案)について

分類	ご意見	今年度対応状況及び今後の対応(案)	備考(対応資料)
植生	① 昨年の出水後、現地で確認したところ、ヤナギの地上部は流れても根は残っており、ヤナギは残っている。ヤナギは伐採しても萌芽再生してしまう非常に繁殖力の強い樹木である。礫河原再生により、礫河原面積は増えているが、このような植物の生理についても考慮しながら進めていく必要がある。	● ヤナギ類の生育状況調査を計画し実施した。	資料-4 : p. 13 自然再生計画書(案) : p. 53
	② 出水により礫河原一面に自然の力が均等に働いたように見えるが、実は不均一な力が働いていて、比高差のある地形が多く箇所でみられた。比高の高いところではヤナギは多く残っており、今後生長していくと考えられる。このことは自然の力だけで礫河原を維持することは難しいことを示しており、今後も継続して手を加えていかなければ、礫河原は維持されないと考えられる。	● ヤナギ類の生育状況調査結果を今後の河川の維持管理に反映させる。	資料-4 : p. 14, 15, 16 自然再生計画書(案) : p. 45
魚類	① 阿賀川では、瀬は多くの魚種の再生産の場となっている。淵は産卵後の冬場や夜間の大型の魚類の休む場所となっている。魚類にとって瀬や淵はなくてはならない重要なものであり、瀬、淵に着目してこれからもモニタリングを継続してほしい。 イトヨ及びウケクチウグイについては、生態情報について不明な部分が多いが、環境データを収集していけば、産卵場などの生態に関わる情報が分かってくるのではないかと。	● 魚類調査時に生息環境の記録を行い、瀬、淵、ワンド等の環境を考慮して調査地点を設定し調査を実施した。 ● イトヨについては、湧水調査及びイトヨ調査を実施し、阿賀川におけるイトヨの生息環境を整理した。 ウケクチウグイは秋季に1個体のみ確認したが、依然生態は不明な部分が多く、今後も引き続き着目し調査を継続する。	資料-4 : p. 18, 19 自然再生計画書(案) : p. 47
	② 秋は未成魚などその年生まれの幼魚などが確認でき、生息している魚種の確認の調査に適している。春は、多くのコイ科の魚類が産卵する時期である。魚類の調査時期として夏と秋が設定されているが、夏季調査を前倒して春季の調査について検討してほしい。	● 平成28年度は、現地調査に関わる許可手続きに時間を要しており、夏季・秋季の実施となった。平成29年度調査より、夏季調査を前倒して春季に実施する。	自然再生計画書(案) : p. 47, 48
鳥類	① コチドリ、イカルチドリの繁殖状況は礫河原が再生されている証拠と言える。モニタリングの3種の他にも、阿賀川ではミサゴ、ヤマセミ、カワアイサ等様々な生活様式をもった種が生息しており、多様な環境があれば多様な鳥類が生息できるようになるはずである。今後もモニタリングを行っていけば、市民の興味、理解が広がると考えられる。	● 平成28年度もドリ類等の礫川指標種の繁殖状況調査を継続して実施した。 ● 礫河原指標種の他に、一般鳥類調査を春季、夏季、秋季に実施し、鳥類相の把握を行った。 ● 調査結果については、当検討会含め、様々な機会を通し広報する。	資料-4 : p. 20, 21
小動物類	① 小動物類では礫河原の指標となる種はないが、参考になるため、任意観察で生息種を確認することで良い。その他、ノウサギは、河川敷で生活しているのかどうか、スッポンはおそらく放逐個体ではないか、ツチガエルは再生産しているのかといったことが気になる。	● 平成28年度も引き続き、他の調査と兼ねて任意観察を実施した。	資料-4 : p. 23
昆虫類	① カワラバタについては、昨年9月の出水を受け、一時的に個体数が減少していると思われるが、また回復していくと考えられる。 カワラバタ以外の種についても、任意観察も実施してほしい。	● カワラバタ調査を継続して実施し、個体群の維持を確認した。 ● 平成28年度は秋季に任意採集、ピットフォールトラップを実施し、昆虫類相の把握を行った。	資料-4 : p. 22
市民活動	① 計画案については基本的にはこのままでよい。その他、阿賀川では昭和30年頃は樹林伐採や砂利採取を盛んにやっていたが、その後樹林化した。前回の検討会で生態系が変化することがわかり、自然再生で河川敷を広げていくことは良いと思う。	—	—
モニタリングの方針	① 自然再生は良い方向に進んでいる。出水によって大きな土砂だけでなく、小さな土砂も移動していて、この河床の変化で生物がどのような応答をしていくか、各委員の先生方に今後も見て頂きたいと思う。	—	—